シンガポール日本人学校におけるイマージョン教育（体育）の成果と今後の課題について

前シンガポール日本人学校中学部　教諭
埼玉県鴻巣市立川里中学校　教諭　金　子　満　江

キーワード：イマージョン教育，英語力，体育技能

１．はじめに

シンガポール日本人学校は，「豊かな国際感覚を持ち，世界の人々とつながろうとする人材の育成」を図るため，英語教育を重視し，中学部ではイマージョンプログラム，英会話学習をカリキュラムに取り入れた教育を行っている。イマージョン教育とは，“Immersion” という英語から名づけられ，日本語では「浸す・投入される」となどど訳されている。イマージョン教育は，通常の教科の学習が第２言語で行われるプログラムで，教師は第２言語を教えるのではなく，通常の教科内容を第２言語で教えることである。イマージョンプログラムの目的は，「英文法」や「英会話」にとって代わるものではなく，生徒が英文法や英会話の授業で習った英語を使うことによって，一層英語力を伸ばしていくという英語プログラム全体の強化というところにある。そこで，シンガポール日本人学校の生徒に期待されることは，日本人としてのアイデンティティを保持しながら英語力を強化することである。また，英語圏であるシンガポールで生活する生徒にとって，英語を使い日常生活でより積極的に生きること，さらに地域をより深く理解することである。イマージョンプログラムは，21世紀のグローバルな要求に対応できる力を育てる取り組みであることが今後更に期待される。

２．調査目的

本校におけるイマージョンプログラムは，1995年に始めてシンガポール日本人学校中学部に導入され体育をはじめとして，美術，家庭そして，１年遅れで音楽へと広げられた。本校では，①生徒の実践的英語力をたかめるため　②既存の英語プログラムを補うため　③英語圏で生活していける基礎を築くため　④地域社会とかかわっていける自身を持たせるため　⑤外国語を話せることで将来の可能性をより豊かにするためである。今回，３年生を対象に調査し，中学校３年間でのイマージョンプログラムの成果と課題を知ることを目的とした。

３．調査対象　　第３学年生徒（83名回答）

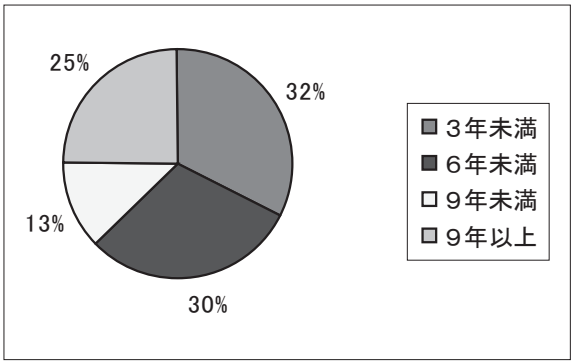

図１　シンガポール滞在歴（Stay in Singapore）

(1) シンガポール滞在歴

滞在歴３年未満の生徒が32%，６年未満の生徒が30%である。９年以上の生徒も25%いることから，半数以上の生徒が英語に触れる期間が長いことがいえる。

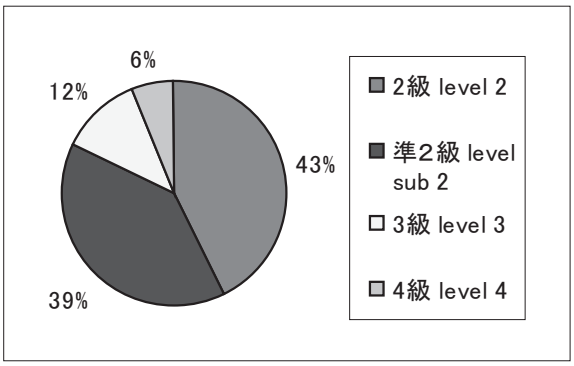

図２　英語能力（English Skill）

(2) 英語能力

２級，準２級をあわせると82%で英語のレベルが高いといえる。これは，日本の中学校をはるかに超える数値である。本校生徒の英語能力が高いことがいえる。

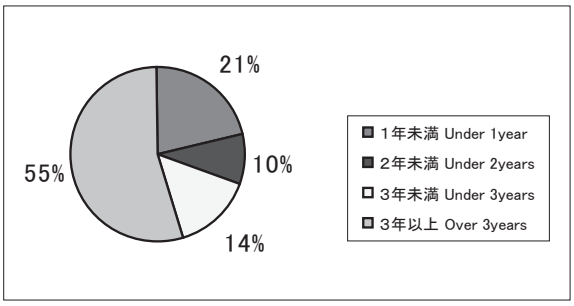

図３　イマージョン教育歴（IMM Years）

(3) イマージョン教育歴（体育）

半数以上はイマージョン体育を３年以上経験している。小学校がシンガポールの生徒が多く，小学校から継続してイマージョン体育を経験している。中には９年間経験している生徒もいた。転入生も多くいるので，１年未満の生徒も相当数いる。

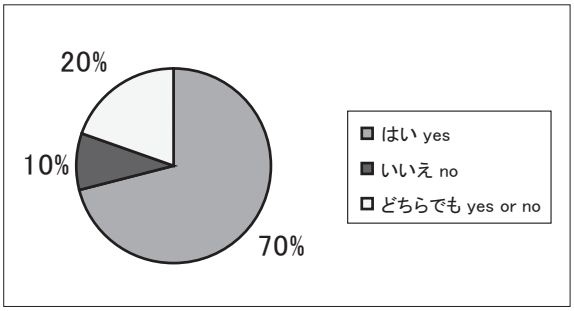

図４　英語力向上（Improvement of Eng Skill）

(4) 英語力向上

イマージョン体育を受けてきて，英語力の向上があったかどうかの質問に対し，70%が向上があったと感じている。しかし，20%の生徒はどちらともいえないと感じている。

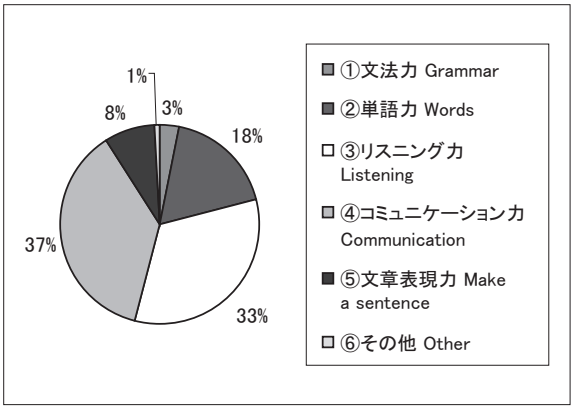

図５　身についたと思う力（Get a Skill）

(5) 身についたと思う力

イマージョン体育を受けて，英語力がついたと感じている生徒に具体的に身についた力を聞いてみると，37%がイマージョン教師とのコミュニケーション能力だと考えている。また，33%の生徒はリスニング力が身に付くいたと考えている。

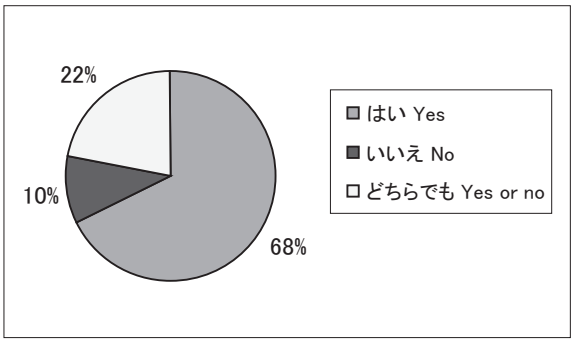

図６　体育技能の向上（Improvment of PE Skill）

(6) 体育技能の向上

英語での体育授業で，体育技能が向上したかについては，68％の生徒が向上したと感じている。しかし，22％の生徒はどちらともいえないと感じている。

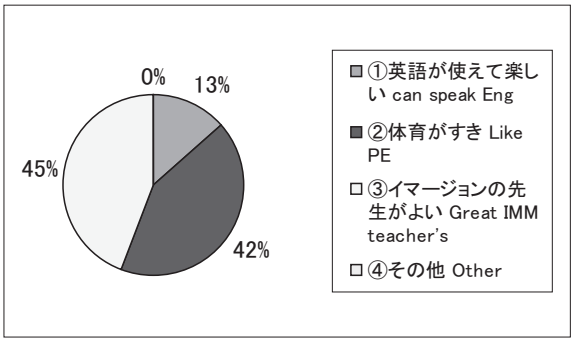

図７　技能向上の理由（Reason of Improvement）

(7) 体育技能向上の理由

イマージョン体育を受けてきて，体育技能が向上したと感じている生徒の理由として，イマージョンの先生がすばらしいからが45％である。次いで体育がすきだから42％であった。

４．結果の分析と考察

(1) 日本人学校の英語能力とイマージョン教育との関係

日本人学校の英語能力は日本国内の英語能力に比べ非常に高いレベルである。それは，生徒の60％近くがシンガポール滞在年数が３年以上であり，英語を使う習慣が多く英語に慣れていると考えられる。英語検定では，準２級以上が82％という高い数値でるが，これは，英語を使う国ということもあり，生徒や保護者の英語に対する期待も高いことも，考えられる理由のひとつである。また，学校教育方針の一つは「英語教育力の向上」であり，その取り組みとして英語や英会話の授業時数が他校より多いことも，英語能力を引き上げている理由であろう。また，もう一つの取り組みとしてイマージョン教育を実践している。これは，体育，音楽，美術，家庭科の技能教科で実施している。体育におけるイマージョン教育の経験者は，半数以上の生徒がイマージョン体育を経験しており，中学での授業も違和感なく取り組めているようである。

(2) イマージョン教育で身に付いた英語力と体育技能の向上

イマージョン教育を受けて，身に付いた力としては，１位コミュニケーション能力，２位リスニング力であった。コミュニケーション能力は，誰しもが身に付くとは限らず，イマージョン教師のよりフレンドリーなキャラクターが，生徒に英語を違和感なく聞き入れさせることが考えられる。

また，イマージョン教師は，生徒に合ったスピードやわかりやすい単語などを使い生徒がより理解しやすい話し方や飽きさせない話題を取り入れて説明するなどして，生徒の興味関心を高めている。

生徒のアンケートで「イマージョン教育を受けて体育技能の向上があった」という結果でわかるように，その理由の１番は，やはりイマージョン教師の影響が大きく，教師の人柄から英語も体育授業も楽しいという結果だった。また逆に「技能が上がらなかった・英語力が向上しなかった」という理由は，圧倒的に，「体育が苦手」「英語が苦

手」というイマージョン教育だからという理由よりも，もっと根本的なところに問題があることがわかった。そしてそれは，生徒たちのモチベーションが上がらなかったと同時に，技能や能力の向上につながらなかったということである。また，英語のできる生徒と苦手な生徒に，イマージョン教育によって英語力が身に付いたとは考えていないということがわかる。それは，イマージョン教師は，多くの師範を見せたり，絵を示すなどしてわかりやすく説明しているため，英語能力の高低に関わらず英語を聞き取らなくても理解できるからということである。

５．今後の課題とまとめ

今回初めて，アンケートによる調査を行い実態について知ることができた。それによると，イマージョン教育は効果はあるということがいえるが，体育授業のあり方によっては，効果があがる場合とそうでない場合とが明確になるだろう。それは，日本の文化と考え方の違いをイマージョン教師がどの程度理解できるかが大きな壁となるだろう。イマージョン教師が，日本の教育課程にそった体育授業を展開するには，日本の教育システムや指導体制をしっかり理解してもらい，日本人教師とイマージョン教師の連携をしっかりとらなくてはならない。

国によっては「体育」を「EDUCATION」と位置づける国もあれば，「SUPORTS」と位置づける国もある。日本のように「体育」授業を通して，生徒の健全な身体の発達を促し，同時に運動能力や健康で安全な生活を営む能力を育成し，人間性豊かな「生き方」は育むことと位置づけているいわゆる「EDUCATION」と，より専門的な技能を身に付け，競技や競争させることを目的としている「SUPORTS」や「楽しむ」ことを目的としている「RECREATION」など，それぞれ国の「体育」に対する考え方はそれぞれに違いがある。

よって，イマージョン教師が日本の「体育」をどれほど理解し，実践できるかは，われわれ日本人教師との綿密な議論や打合せが非常に重要になってくるわけである。

例えば，バスケットボールやサッカーなど集団競技だけに重点をおいて指導したり，個人の記録だけに重点をおいて指導するなど偏ることも多々ある。時として，日本の学校では生徒同士の人間関係に注意しながら指導しない場合もある。それは，生徒指導担当なのか，教科指導担当なのか割り切った考え方によるものである。

そのことから，イマージョン教師と日本人教師との共通理解が非常に重要になってくるのである。

本校は昨年度から，技術志向の教師主体の一斉指導から，課題解決型学習の生徒主体の個別指導法に変えた。当初，イマージョン教師は，今までに経験のない指導法に戸惑いがあったが，生徒の動きや反応を見ながら，指導展開もスムーズにいくようになってきている。最近では，イマージョン教師から英語で「何が課題なのか」「どうしたいのか」など積極的に生徒の話合い場面に入り，生徒も英語で受け答えをすることができるようになってきている。しかし，課題の与え方や，それを解決させるための方法や場の設定など，試行錯誤の部分も多々ある。事実，生徒が課題を考えたり解決方法を話し合ったりする場面は，生徒同士では日本語で話し合っているため，イマージョン教師だけでは，十分理解できない点が多々あり，今後それをどう解決していくかこちらの課題も残っている。

また，あまり日本の学校のシステムにはめ込みすぎても，イマージョン教師のキャラクターや彼らの持っている素晴らしい能力を発揮できずに終わってしまうのではないかと感じる。

今後，イマージョン教師のよさを発揮しつつも，イマージョン教育の趣旨に合った展開を行いより充実したイマージョン教育となることを期待したい。